

「柔道整復師」とは、どんな職業かご存知ですか。接骨院や整骨院で施術をしたり、スポーツトレーナー、あるいは介護などの分野でも機能訓練指導員として活躍できる国家資格です。柔道整復術は日本の伝統療法で、骨・関節・筋などに関わる損傷を「手」と「身近にある物」を使って正常の状態に治す点が特徴です。

私は、1997年に神戸市で接骨院を開業し、患者さんに施術を行っているほか、スポーツ選手やお年寄りの健康指導もしています。

2006年からは、モンゴルでの柔道整復術の指導にも携わっています。活動のきっかけは、柔道整復師の施術を受けていたモンゴル出身の力士が「母国にも柔道整復術を広めたい」と発言したことでした。こうして、外務省や在モンゴル日本国大使館、現地唯一の国立医療科学大学、そして私の所属する日本柔道整復師会が協力して、視察などを行い、2009年からJICAの草の根技術協力事業による活動が始まりました。

これまで30回以上モンゴルを訪問していますが、協力が始まった当初は自分も現地で指導を行うようになるとは思っていませんでした。とは言え、このような活動の計画があることは知っていましたので、声が掛かったときは、二つ返事で参加を決めました。

モンゴルでは、地方を回って医師に対する指導を行ったり、首都のウランバートルで市民対象の公開セミナーや、地方医師を目指す学生向けの講義を行っています。特別な医療



モンゴル地方部の医師に骨折時の固定法を指導する根来さん

器具を必要とせず、例えば針金など、身の回りにある物を使って処置できる柔道整復術は、開発途上国で受け入れられやすく、地域の現状に即した協力が実現しています。技術を学ぶ学生たちは勉強熱心で、今後、現地で柔道整復術の普及を中心となって支える人材が育っています。

2011年3月11日に東日本大震災が発生したとき、私はちょうどモンゴルから帰国したところで、空港にいました。地震発生から数日後には被災地を視察し、被害状況を把握した上で、5月に南三陸町で施術を行いました。避難所で生活されていた方々は、生活の疲れから体の不調を訴えていました。

このような国内での災害時の対応やモンゴルでの技術指導などの際は、長ければ1カ月程度、現地に滞在することもあります。神戸で一緒に接骨院を経営している弟や家族の理解・協力の下、国内外で柔道整復師として活動に従事できることを誇りに思います。

小 学生の時に、アフリカの大地をバイクで走る青年海外協力隊の看護師をテレビで見たんです。その姿が凛として格好良くて、それ以来、青年海外協力隊として開発途上国で活動することが夢となり、看護師の道に進みました。

実際に応募したのは日本で7年間働いた後でした。私の専門は脳外科で、看護師5年目からは救命救急センターに勤務し、医療の前線での人命を救う仕事にやりがいを感じていました。それでも、休職でなく、退職して青年海外協力隊に参加したのは、派遣期間中に価値観に大きな変化が生まれるかもしれないと思ったからです。

2011年、晴れて青年海外協力隊となった私の派遣先はセネガル東南部のクンベントゥーム県保健センターでした。同県では村落の衛生状況が悪く、村の有力者に働き掛けながら住民の健康意識向上を目指す啓発活動などを行いました。

現地では、医療従事者が患者を見下す傾向があるという問題がありました。これは、大勢の患者さん一人一人に、じっくり向き合うことが難しい日本の病院の現状にも通じることです。その一方、セネガルの村では若い男性が近所のお年寄りを世話する姿などが当たり前に見られました。そんな光景を見て、“医療従事者と患者”ではなく、“人と人の助け合い”こそ、私が理想とする地域の在り方だと気付いたのです。

こうして、医療が必要な人の自宅に看護

師が出向く「訪問看護」という新たな夢を見つけた私は、帰国から4カ月後にケアマネージャーの資格を取り、もともと訪問介護事業を行っていた株式会社スマイライフに、昨年、新たに訪問看護事業部を立ち上げました。社員の協力の下、渋谷区にあるオフィスを拠点に、3キロ圏内の約50軒の家を自転車やバイクで訪問しています。

私が「家」にこだわったのは、患者さんの“その人らしさ”を大事にしたかったからです。人の生活の一部として医療を提供するようになった今、人間味あふれる仕事に以前よりも深いやりがいを感じています。

長期的な目標は「町づくり」です。子ども、お年寄り、学生、社会人などそこに住む全ての人が、コミュニティーの中で互いに助け合いながら安心して暮らせる昭和の日本のような温かい町をつくりたいと思います。



セネガルで、助産師と共に妊娠・出産の経過、また、病気の経過について住民に啓発を行う小松さん

長 野県は全国でも「長寿県」として知られています。中でも佐久市は、“全ての市民が健やかで生きがいある人生を全うできること”を目指して「地域医療」に積極的に取り組んできました。地域医療とは、病院などの医療機関が中心となって住民の健康増進を支えたり、疾病予防に取り組むものです。その実践には、住民が主体的に健康づくりに参加することや、行政機関との連携が欠かせません。

私は、大学でそんな地域医療を学んでいましたが、世界で見聞を広げたいと思い、モンゴルやインドネシアなど開発途上国でのボランティアに参加したことをきっかけに、徐々に国際保健にも関心を持つようになりました。そして、HIV/エイズの現状を確かめるために訪れたウガンダで、エイズ孤児が差別を受け、教育の機会を奪われている現実を知り、将来、国際保健分野で貢献することを決意しました。

佐久総合病院で研修医として地域医療を学んで小児科医となった後、2012年から、ザンビアで「HIVモバイルクリニック」の活動にJICAの専門家として協力しました。これは、郡の病院から医師が出張診療することで、医療機関や医師が不足している地方部でもHIV/エイズ感染者の定期的な治療を目指す国家プログラムで、私はそのマネジメント支援などに携わりました。

ザンビアでは、政府主導で治療体制が強化された一方、差別から病院に行くことをた



ザンビアの「HIVモバイルクリニック」の活動で、ヘルスセンターの看護師や助産師に母子感染予防策の指導を行う加藤さん

めらい、亡くなる患者さんもいました。こうした現状を知り、予防や啓発の必要性を強く感じました。

地域のニーズや信頼関係を大事にする地域医療の考え方は、こうした場面で生かすことのできる日本の知見です。そんな思いから、地域医療の考え方に代表される佐久市の保健医療福祉がどのように発展してきたのかも一度学び直し、ミャンマーなどでの海外事業に協力する中で、開発途上国の人々に伝えています。

今後も、国内で小児科医として診療を行いつつ、地域のニーズに即した保健医療の在り方を世界に発信していきたいと思っています。



公益社団法人 日本柔道整復師会  
国際部員

NEGORO Shinya

根来 信也さん

A. どこに行っても、現地の人々と共に課題を考え、困難を乗り越えながら与えられた役割を全うできる人。機会があるならば迷わず協力しよう！



株式会社スマイライフ 取締役  
代々木上原事業所 所長 看護師

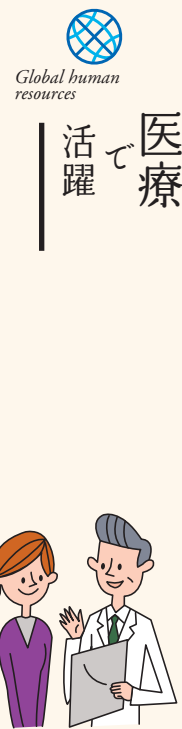
KOMATSU Minori

小松 美紀さん

A. 「普通の人」でしようね。大切なのは人間力。語学力やコミュニケーション能力など特別なスキルは必ずしも必要ではないと思います。

Q. グローバル人材とは…

地域に寄り添い  
人々の健康を守る



A. グローバルな価値観に基づき、世界の課題に取り組める人。さまざまな価値観を理解するには、まず日本をよく知ることが肝心！



長野厚生連佐久総合病院  
国際保健医療科／小児科 医長代理

KATO Takuma

加藤 琢真さん